

令和 7 年度 高校一般入学試験

バタバアコース

# 国語

(50 分／100 点満点)

《受験上の注意点》

1. 監督の先生の指示があるまで、試験問題に手を触れないでください。
2. 問題冊子は 16 ページ、解答用紙は 1 枚あります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
4. 問題冊子・解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
5. 問題冊子・解答用紙の回収については監督の先生の指示に従ってください。

受験番号	
氏 名	

**Kyoei** 京都共栄学園高等学校

「二」 次の文章をよく読んで以下の設問に答えなさい。出題の都合上、一部原文を改変した箇所があります。（50点）

主人公の藤崎葵<sup>ふじきあおい</sup>は奏社<sup>かなでもり</sup>高校の二年生。同級生の飯野と五つ年上の東山の二人から好意を寄せられ、校務員の人生先生に相談していた。いつも学校を出るタイミングなどが合って葵は飯野に好意を抱きかけていたが、そのタイミングのよさは飯野の葵へのストーカー行為の結果であることを知った場面である。

「もう嫌だ……」

言葉が自然と出てきてしまった。

その言葉をつかまえたのは飯野君だった。

「もう嫌だって、何が？」

私は答えられない。答えないままなのに、飯野君はまた距離を詰めてくる。

「嫌だって僕のことじゃないよね？」

また一歩近づいてくる。

「だって僕はこんなにも藤崎さんのことが好きなのに……！」

①飯野君が手を伸ばしてくる。

その時だった――。

「――もうとつくに下校の時間はすぎていますが？」

廊下から声が聞こえた。

その場所に立っていたのは、人生先生だった――。

「なんで、ここに……」

その言葉に人生先生はすぐに答えた。

「教室の戸締りは、校務員の私の役目なので当たり前のことですよ。それよりもあなたたちはここで何をしているんですか？」

「何をつて……」

飯野君は上手く答えられない。突然人生先生が姿を現したことに × 食らっているようだった。でも私も同じだった。こんなタイミングで人生先生が現れるなんて思わなかった。

人生先生は、今度は私だけを見据えて言葉を続ける。

「藤崎さん、あなたは？」

「……」

喉がふさがってしまったように声が出ない。

「ちゃんと考えて、あなたの今の気持ちを答えてください」

考えて、答える。あの時と一緒だ。私が最初に相談しにいった時。あの時も人生先生はそう言った。考えなきゃ。考えることは人間に許された贅沢ぜいたくの一つだから。私はちゃんと考えて、答えを出さなければ――。

「人生先生、助けてください……」

私の中から出てきたのはたった一つの言葉だった。

その瞬間、人生先生が私と飯野君の間に入ってくれた。

②この状況が気に食わなかったのは飯野君だった。

「……邪魔をしないでください、あなたはこの学校の先生じゃないでしょう」

飯野君が人生先生を睨みつけて言った。敵意をむき出しにした表情だ。

「ええ、私はこの学校の先生ではありません。でも一人の大人として、助けてくださいと声を上げた子を見過ごす訳にはいきません」

「……なんてだ」

飯野君が声を上げる。

「なんでみんな邪魔するんだ！　なんで藤崎さんも逃げるんだよ！　僕はこんなに愛しているのに！　恋と愛の違いがどうかと言ったよね？　僕のこの思いこそが本当の愛なのに！」

確かに私は飯野君に質問した。でもあの時飯野君は、愛は安心感とかそういうものだと言っていた。でも今は安心とはかけ離れた状況に私を追い込んでいる。

私はそんなものを愛とは認めたくなかった。上手く説明できないけれど、その思いは愛ではないと思った。相手のことを困らせておいて本当の愛だなんて間違っている。

——その時、人生先生が穏やかな声で言った。

「③あなたの言葉も、その行動も愛ではありませんよ」  
「なっ……」

明らかに狼狽<sup>うろた</sup>えた飯野君に、人生先生は言葉を続ける。

「百歩譲って④恋に近いところはあるかもしれませんがね」

「恋に近い？ 一体何を言ってる……」

「私の考えを説明しましょう」

まるで今から授業を始める先生のような言い方だった。

人生先生は、さっき私には教えてくれなかった、恋と愛の違いについての考察を話し始めた――。

「私は、恋と愛は主体が違うんだと思います」

「恋と愛は主体が、違う……？」

飯野君が戸惑った声をあげる。でもその言葉に戸惑ったのは、私も一緒だった。恋と愛は主体が違う、とはどういうことなのだろうか……。

「恋は私が相手のことを知りたい、私が相手に触れたい。私が好きだと言いたい。私がそばにいたい。という風に、『私』が主体になります。かたや愛は、あなたに喜んでもらえることをしたい。あなたのためにできることをしたい。あなたが幸せでいてほしい。という風に、『あなた』が主体になるんです。つまり愛は自分より相手のことを第一に考えて、相手のためを思っていることなんだと思います。それに愛は主体が相手にあるからこそ、恋人だけではなく、家族や友人、その他多くの人ではない存在にも向けられるものだと思っています」

（中略）

人生先生の言葉は飯野君に向けたはずのものなのに、私にも響いていた。

人生先生は、いつの間にか話に聞き入っていた飯野君に向かって言葉を続ける。

「だからこそ飯野君。あなたのしてきた行動は、決して愛なんかではないと思います。始まりは恋だったのでしょう。それがやがて愛に変わる可能性もありました。でも途中で道が変わってしまいました。あなたがしてきた自分本位な行動は、恋でも愛でもなく、ただの迷惑行為になってしまったんです」

「ただの迷惑行為……」

飯野君が、悲しそうに言葉を漏らした。言葉を続けられなかったのは、その言葉が、胸の奥に突き刺さってしまったからだろう。人生先生の言葉で説明がついてしまったのだ。今までの自分の気持ちと行動の違いに……。

「例えばあなたが今まで読んだ本や観た映画の中には、愛するひとのために自分から Y を引いたり、遠くから幸せを願ったりする人はいませんか？ 本当に、愛しているのならそういう形もありえます。もちろん、愛する人と結ばれる物語も数多くあることは確かですが……」

「……」

飯野君は、ただじっと俯<sup>うつむ</sup>いて床をみつめていた。

人生先生はゆっくりと飯野君のもとに歩み寄る。

「飯野君。もしも、あなたが今もまだ藤崎さんのことを本当に大切に想っているのなら……」

人生先生が、言葉を続ける。

「もうこんな悲しませるようなことはしないでくれませんか？ 藤崎さんのために——」

「……………」

ずっと顔を俯けていた飯野君が、小さく首を縦に振ってから、顔をあげた。

「藤崎さん……」

飯野君が、私のことを見つめる。

その眼差しは、いつも私に向けてくれていたような温かさをかすかに帯びたものだった。  
まなざ

それから今にも泣きだしそうな顔で言葉を続ける。

「好きだった……。それなのに、僕は……」

その先は、言葉にならなかった。

人生先生が、そっと飯野君に手を差し伸べる。

「人生先生……」

⑤その手を飯野君が受け取ってくれて本当に良かったと、私は思う――。

(清水晴木『17歳のピオトープ』)

問一 傍線部①「飯野君が手を伸ばしてくる」とありますが、ここでの飯野君の気持ちとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 藤崎さんを逃がしたくないので藤崎さんの手をつかんでおきたいという気持ち。

イ 自分が伸ばした手を藤崎さんに握ってもらい和解したいという気持ち。

ウ 手を伸ばして自分が大好きな藤崎さんに触れたいという気持ち。

エ 藤崎さんの手に触れて自分の手の温もりを知ってほしいという気持ち。

問二 空欄 

×
---

 に入れるのに最も適当な漢字一字の語を書きなさい。

問三 傍線部②「この状況」とはどういう状況ですか、最も適当と思われるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 飯野君の思いが藤崎さんにうまく伝わっていない状況。

イ 人生先生が藤崎さんと飯野君の間に割って入っている状況。

ウ 藤崎さんと人生先生の二人に飯野君が攻められている状況。

エ 教員によって生徒間の直接のやりとりが邪魔されている状況。



問四 傍線部③「あなたの言葉も、その行動も愛ではありませんよ」とありますが、人生先生は飯野君の言葉や行動を、なぜ

愛ではないのですか、次の空欄を、三十五字以内で埋めなさい。

飯野君の言葉や行動は  から。

問五 傍線部④「恋に近い」とありますが、人生先生が飯野君の言葉や行動を「恋」と言わないのはどうしてですか、最も適

当と思われるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恋と言い切るには、まだまだ相手に対する飯野君の思いが弱いから。

イ 飯野君の行動が、相手にとって迷惑行為になってしまっているから。

ウ 飯野君の気持ちが強すぎて、むしろ愛と呼ぶべきものだから。

エ 飯野君がまだまだ若すぎて、恋と呼ぶには幼い面を残しているから。

問六 空欄  Y に入れるのに最も適当な漢字一字の語を書きなさい。

問七 傍線部⑤「その手を飯野君が受け取ってくれて本当に良かったと、私は思う」とありますが、なぜ「私」は「本当に良かった」と思ったのですか、次の空欄を、二十五字以内で埋めなさい。

人生先生の手を飯野君が受け取ったことは  から。

「二」 傍線部の漢字を含むものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(20点)

① 出番まで舞台横でタイキする。

ア これでも今年もアンタイだ。

イ 桜が咲くキセツになった。

ウ 犯人をタイホする。

エ 旅人をセツタイする。

② 窓をコワす。

ア 窓が地震でハソンする。

イ ナダレが起きる。

ウ カイメツ状態になる。

エ ギャンブルでハメツする。

③ エタイの知らない人。

ア タイショウ時代に生まれた。

イ 新人をカクトクする。

ウ タイジン恐怖症。

エ エホンを読む。

④用意シュウトウ。

ア 頂上にトウタツする。

イ テントウした自転車。

ウ 事故のトウジ者になる。

エ ザットウを歩く。

⑤資産をフやす。

ア ショクサン興業。

イ 元金に利子をカサンする。

ウ ショクサイされた林。

エ 米の価格がコウトウする。

〔三〕 次の文章をよく読んで以下の設問に答えなさい。出題の都合上、一部原文を改変した箇所があります。（30点）

「障害者」という言葉の表記についてです。「障害者」という表記に含まれる「害」の字がよろしくないということで、最近では「障碍者」「障がい者」など別の表記が好まれるようになってきました。

ところが、見えない人がテキストを読むときは、たいていは音声読み上げソフトを使います。すると、音声読み上げソフトの種類によっては、「障がい者」という表記が認識できないらしい。「さわるがいしゃ」という読みになってしまうそうです。つまり、誤った単語になってしまう。

もちろん「さわるがいしゃ」と誤読されても、というか誤読されて初めて、見えない人は執筆者の配慮に気づくことができません。だからこの失敗は、配慮を必要とする障害者にとっては成功なのかもしれません。

けれども、それが差別のない中立的な表現という意味での「ポリティカル・コレクトネス」に抵触しないがための単なる「武装」であるのだとしたら、むしろそれは逆効果でしょう。障害の定義を考慮に入れるなら、むしろ「障害者」という表記の方が正しい可能性もある。

（中略）

そもそも障害とは何でしょうか。

「障害者」というと「障害を持っている人」だと一般には思われています。つまり「目が見えない」とか「足が不自由である」とか「注意が持続しない」とかいった、その人の身体的、知的、精神的特徴が「障害」だと思われている。

しかし、実際に障害を抱えた人と接していると、いまだ根深いこの障害のイメージに対しては、強烈に違和感を覚えます。

端的に言って、こうした意味での障害は、その人個人の「できなさ」「能力の欠如」を指し示すものです。「できなさ」や「能力の欠如」だから、触れてはいけないものと感じられる。

何人もの研究者が指摘していますが、こうした個人の「できなさ」「能力の欠如」としての障害のイメージは、産業社会の発展とともに生まれたとされています。現代まで通じる大量生産、大量消費の時代が始まる時期、均一な製品をいかに速くいかに大量に製造できるかが求められるようになりました。その結果、労働の内容も画一化されていきます。車を作るのに、Aさんが作ったのとBさんが作ったのでは出来上がりが違うのでは困る。「誰が作っても同じ」であることが必要であり、それは①「交換可能な労働力」を意味します。

こうして労働が画一化したことで、障害者は「それができない人」ということになってしまった。それ以前の社会では、障害者には障害者にできる仕事が割り当てられていました。ところが「見えないからできること」ではなく「見えないからできないこと」に注目が集まるようになってしまったのです。

こうした障害のイメージに対しては、一九八〇年ころから、世界各国で疑問がつきつけられるようになります。さまざまな論争や事件の詳細な歴史はここでは記しませんが、「個人のできなさ」とは違う形で障害をとらえる考え方が模索されました。こうした運動は「障害学」という新しい学問をも生みだしました。

そして約三十年を経て二〇一一年に公布・施行された我が国の改正障害者基本法では、障害者はこう定義されています。「障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」。つまり、社会の側にある壁によって日常生活や社会生活上の不自由さを強いられることが障害者の定義に盛り込まれるようになったのです。

従来の考え方では、障害は個人に属していました。ところが、新しい考えでは、障害の原因は社会の側にあるとされた。見

えないことが障害なのではなく、見えないから何かができなくなる、そのことが障害だと言うわけです。障害学の言葉でいえば、②「個人モデル」から「社会モデル」の転換が起こったのです

「足が不自由である」ことが障害なのではなく、「足が不自由だからひとりで旅行にいけない」ことや「足が不自由なために望んだ職を得られず、経済的に余裕がない」ことが障害なのです。

先に「しょうがいしゃ」の表記は、旧来どおりの「障害者」であるべきだ、と述べました。私がそう考える理由はもうお分かりでしょう。「障がい者」や「障害者」と表記をずらすことは、問題の先送りにすぎません。そうした「配慮」の背後にあるのは、「個人モデル」でとらえられた障害であるように見えるからです。むしろ③「障害」と表記してそのネガティブさを社会が自覚するほうが大切ではないか、というのが私の考えです。

もっとも、④法律の定義が変わったからといって、それはあくまでお題目にすぎません。障害の社会モデルがまだまだ浸透していないのは、障害を受け止めるアイデアや実践が不足しているからです。障害は高齢化と密接な関係があります。高齢になると、誰でも多かれ少なかれ障害を抱えるからです。障害を受け止める方法を開発することは、日本がこれから経験する前代未聞の超高齢化社会を生きるためのヒントを探すためにも必要です。

ただ、注意しなければならないのは、⑤社会の側に障害があるからといって、それを端から全部なくしていけばいいというものではない、ということです。「パスタソースを選べないこと」は社会モデルの定義にしたがえば「障害」です。しかしこの障害をなくすことは、見えない人のユーモラスな視点やそれが社会に与えたかもしれないメリットを奪うことでもありません。

もちろん味を選べたほうがいいのは当然です。しかし、見えない人と見える人の経験が一〇〇パーセント同じになることは

ありません。見える人がパックのビジュアルから想像する「味」と、見えない人がたとえばパックの切り込みで理解する「味」は、決して同じものにはならないでしょう。違いをなくそうとするのではなく、違いを生かしたり楽しんだりする知恵の方が大切である場合もあります。

いずれにせよ、「味が分かるようにするのがいいだろう」と健常者が見えない人の価値観を一方的に決めつけるのが一番よくないことです。「見えないこと」が触媒となるような、そういうアイデアに満ちた社会を目指す必要があるのではないのでしょうか。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』)

注) ポリティカル・コレクトネス…人種・宗教・性別などの違いによる偏見・差別を含まない、中立的な表現や用語を用いること。

パスタソースを選べないこと…問題文より前では、視覚障害がある人が、パスタソースのパックの形状だけでは、異なる味のパスタソースを判別できないというネガティブな状況を、くじ引きや運試しのように考え、ポジティブに解釈している、という話が書かれていた。

問一 傍線部①『交換可能な労働力』とありますが、これはどのような労働力ですか。三十字以内で書きなさい。

問二 傍線部②『個人モデル』から『社会モデル』の転換』とありますが、これはどういうことですか。七十字以内で書きなさい。

問三 傍線部③「障害」と表記してそのネガティブさを社会が自覚するほうが大切ではないか」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。最適な選択肢を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「障害」を「障がい」と表記することは、障害がある人が害であるという従来のイメージを覆すことになるから。

イ 「障害」と表記することは、属人性を帯びた障害を、日常における不自由であると再定義することになるから。

ウ 「障害」を「障がい」と表記することは、障害者のもつ障害をいったん考えないようにしているだけだから。

エ 「障害」と表記することで、障害者が感じる日常生活の不自由に対して、社会が意識的になることができるから。

問四 傍線部④「法律の定義が変わったからといって、それはあくまでお題目にすぎません」とありますが、これはどういうことですか。最適な選択肢を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 法律を改正し、障害者の定義に新たな文言を付け加えたことには、社会モデルの浸透という本質的解決が伴っていないということ。

イ 障害者の定義を法改正によって変えたところで、障害のある個人に身体的・知的・精神的特徴があることには変わらないということ。

ウ 法改正によって従来の考えは脱したが、日本が高齢化によって多くの障害者を抱えることは避けられないということ。

エ 法律を改めて、障害学における「社会モデル」の定義を盛り込んだことは、日本社会が変容するほんの序の口であるということ。



問五 傍線部⑤「社会の側に障害があるからといって、それを端から全部なくしていけばいいというものではない」とあり

ますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。次の文章の空欄に合うように六十字以内で書きなさい。

社会が生み出す様々な不自由を無くしてしまうと、

問六 本文の内容と合致するものを次の選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見えない人は音声読み上げソフトによってテキストを使うので、「障害者」を「障がい者」と執筆者が配慮することは、本質から目を背けているという点で、かえって逆効果である。

イ 「障害学」という学問が生まれたことは、障害を「個人のできなさ」や「能力の欠如」と捉える考え方を見直す契機となり、社会は新たに障害を定義する必要に迫られた。

ウ 産業社会の発展によって、障害の原因は個人に属するという考えから、障害を生じさせる社会にあるという考えへと転換が起こったが、現代社会においてはこの考えは浸透しきっていない。

エ 障害者が社会生活を営む上で生じる不都合や不便を解消し、障害があることによって生じる、偶発的なアイデアに満ちた社会を目指していく必要がある。

--	--	--	--

---

受験番号

氏名

--	--

	総計	
--	----	--

※問一別解 誰が取り組んだとしても、同一の結果を生み出す労働力。																																																					
問六				問五			問四		問三		問二					問一		①		問七		問六		問五		問四		問三		問二		問一																					
ウ				う			点		の		そ		ア		エ		°					会		ら		ー		障		上		誰		こ		飯		身		イ		い		考		自		イ		面		ウ	
				こ			や		障		の						生					、		で		害		が		が		②		と		野						る		え		分							
				と			、		害		不						活					社		き		の		り		作		ウ		を		君						る		本									
				に			社		が		自						上					会		な		定		が		っ				意		が						と		位									
				な			会		あ		由						の					が		さ		義		均		た		③		味		人						い		で									
				る			に		る		に						不					生		ー		を		一		と		イ		し		生						う		、									
				か			与		人		よ						自					み		や		、		に		し				て		先						愛		相									
				ら			え		の		っ						由					出		ー		個		な		て		④		い		生						の		手									
				°			る		ユ		て						へ					す		能		人		る		も		ア		る		の						本		の									
							メ		ー		生						と					日		力		に		労		、				話						質		こ											
							リ		モ		ま						変					常		の		属		働		製		⑤				に				か		と											
							ッ		ラ		れ						え					生		欠		し		力		品		ア				納				ら		を											
							ト		ス		た						た					活		如		て		°		の				得				ず		第													
							を		な		は						こ					や		ー		い				出				し				れ		一													
							奪		視		ず						と					社		か		る				来				た				て		に													
30																20				50				総計																													
																								100																													

受験番号	
氏名	